

友人代表 森永貞一郎氏の追悼の辞

(昭和五十五年七月九日)

大平正芳さん

いま、私は、貴方のご靈前に永のお訣れを告げようとしております。まさに断腸の思いであります。

貴方は、五月末急病でご入院、当時外遊を予定していた私としては、ご病状を察しましたが、だいぶ落着かれたということで予定通り出発いたしました。その後のご経過も好転を伝え、安心しておりましたが、その矢先き六月十二日早暁、突然の計報に接し、しばし声を失いました。急拠帰国し、空港からご密葬にかけてつけるのがやっとでございました。無常は世の常とは申せ、余りにもあわただしく逝かれた貴方のご中心いかばかりかと察します。痛恨まことにやみ難いものがあります。

貴方は、昭和十一年に大蔵省に入省、以来、お互いの交遊は、四十年に余るものがあります。はじめ、ある外国関係の調査事務で貴方と組んだことを憶えております。貴方の素朴で真面目な落着いたお人柄に魅せられ、その後も機会あるごとに交友を重ねてまいりました。

幾つかのポストを経て、昭和二十三年、貴方は、経済安定本部に転出、私もその頃同本部にいましたが、お互いの住居も近いことから、親しさを加え、家庭的な交わりも深まってまいりました。その後、貴方は

二十四年半ば池田大蔵大臣の秘書官にご就任、私も、大蔵省官房長に復帰し、身近なところで貴方の寝食を忘れての池田さんへの献身ぶりを眼のあたりにしたのであります。

貴方の政界入りのご決意は、すでにこの頂芽ばえていたのでしょうか。二十七年には、郷里で衆議院選挙に初出馬、見事栄冠をになわれ、以来、連続当選十一回に及んでおります。

昭和三十五年池田内閣が成り、貴方は、官房長官として入閣されました。安保問題で荒れ狂った人心をいかにして落ち着かせるかが急務でありましたが、池田内閣は、「寛容と忍耐」をキャッチフレーズに世情を安定させ、国民の関心を大きく経済成長に向けて成功しました。この間、官房長官としての貴方のご苦心を見聞し、頭が下がる思いでありました。その後の十余年にわたるわが国経済の目覚ましい高度成長ぶりは、経済自らの活力によるものではありませんが、その推進に大きく寄与された池田さんの達識と、終始力強く池田さんを補佐された貴方のご業績を忘れてはならないと思います。

その後、貴方は、数々の要職につかれ、四十九年には大蔵大臣にご就任、私もご縁がございまして、同年末日本銀行総裁に就任いたしました。折柄、石油ショック後の経済界の混乱が収まり、厳しかった財政金融の引き締めも緩和に向かうべき時期でありました。貴方は、その間の情勢を洞察し進んで手を打たれ、日本銀行による何回かの公定歩合の引下げにも機敏に応じていただきました。

五十三年秋内閣総理大臣にご就任の直後には、再び石油危機が到来し、物価情勢は、再び急を告げるに至りました。この間に処し、貴方は、敏速に政府全体の施策を整えられとともに、金融面では公定歩合の累次の引上げに英断を以て応じていただいたのであります。私の退任後のことですが、衆議院予算審議

中にも要すれば公定歩合を変更するという先例が開かれたことは、貴方のご決断に負うところが多かったと存じます。

財政面では、大蔵大臣ご在任当時、景気回復のため、公共事業費等を増額し、折からの歳入不振の下、国債発行額が増加し、国債依存度も累増いたしましたことは已むを得ないことでありましたが、貴方は、内閣総理大臣としてご就任後、巨大化する国債発行を憂慮され、財政健全化に向かって、予算編成を力強く指導されたことは、私どものよく知るところであります。最後のご入院中にも財政のことをご心配であられた由を承りました。このことは、政界も政府もまた国民も、貴方のいわばご遺言として私どもが銘記しなければならぬと信じます。

貴方は、国際的にも大いに活躍されました。特に昨年は東京サミットを主宰され、大きな成果を挙げられました。今年にはベネチア・サミットへのご出席が直前になって叶わぬことになりました。

貴方は、一見柔和ななかにも剛直な反面があり、事に当たっては熟慮断行し、信念を貫かれました。内外ともに多難の折柄ますます貴方のご英断に倣うべきものが多かったのに、俄かに貴方を失ったことは誠に残念でなりません。

貴方のご家庭は、クリスチャンの貴方に応わしい清らかな温かいご家風で、訪れる私達の心をいつも豊かにしていただきました。いま家長の貴方のご急逝で志げ子夫人をはじめ、ご家族の皆さまのご悲嘆はいかばかりかと存じますが、皆さまは貴方のご遺志を体し、いまは立派に立ち直っておられます。現に、女婿の森田一氏は、貴方の志を継ぎ、折からの衆議院議員選挙に立ち見事当選されました。今後のご活躍を

期待したいと存じます。

私の好きな詩の一節に『山上在山山幾層』というのがあります。われわれが幸いにしてこの山を越えることができたとしても、眼の前にはまた次の山が立ちはだかるにちがひありません。すなわち、この世界を支えるわれわれの努力には、終点はないかもしれませぬ。これは、貴方が昭和五十年九月ワシントン・I M F 世銀総会での演説の末尾に述べられた言葉であります。貴方の「一生は、とくに政界でのご経験は、山また山でしたが、貴方は、見事にそれを乗り越えてこられ、誠に苦勞さまでございました。しかし、天国にはもう山はないと思います。なにとぞ安らかにお眠り下さい。